

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	短歌 死 : 文苑
Author(s)	望洋城
Citation	龍南會雜誌, 1 3 2 : 7 5 - 7 6
Issue date	1909-10-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5802
Right	

……………何處よりか太鼓の音……………

水前寺の水と空氣に蘇生せしと言ふ人も

街に入りなば、あはれ、草入水晶を粉碎せし如き心地せん。

たゞこの近郊に滿ちわたる秋の日の午後の光りと色調と音とのわかしさに

湧き出でし、わしれざる情緒の搖らぎの何となきこゝろよさを、われはたゞ愛づ。

(四十二年十月十日作)

短 歌

死

望

洋

城

死を思ふ義賊住みける山寨の冷たき石にもたれながらの、
紺碧の空にうかべる雲色のほの白きにも腫の凝る日。
悲しみよ愁も共に寄せてあれ涙ながすに趣もつをの子。
我が胸のぬかるみをしもくさくの荷積める車跡きざみゆく。
故もなく我が秘事のあばかれしとやうの心地せちにたほゆる。
銅羅の音の真中に座して人々の涙のかげに笑みし日もあり。
『生』倦める小さき舟にいとかすか死の波紋こそつたはりてくれ。

象軍は森を過ぎりて大湖に水もどめあり薄月夜かな。
 乞食^{かたひ}らと峠に焼きし笹栗の味わすれぬす丹波路の旅。
 木枯よ朽つる百千の虫を去るかなしき魂のなげかひに似て。
 海賊の砦すたれし岩に攀ぢ洋の人の紅を見る。
 雪の夜や讀經の僧の倦んじがちに燈明ゆれけり十月の寺。
 天體の運行につれ吾が心かはりゆくかなうつることもなく。
 田原坂いがほころべる大栗の毒血の色に夕焼のする。
 阿蘇たびら煙につゞく夕雲のほのむらさきの夢あはきかな。

俳句

紫溟吟社句錄

九月十八日午後、於余根屋。會者十名。

秋晴れ

巢叩けば虫皆あらず秋晴れて 滴人
 秋晴れや鹿島詣の刀鍛冶 文者
 秋晴れや栗の穂末に浮く白帆 春草
 能工の大和巡りや秋日和 汀韻

鯛のなく島の温泉や秋日和
 秋晴れや籬落を綴る柿赤し
 芝山や瘦軀の松を秋はるゝ
 秋晴れや曲藝の象見て歸る
 野戲近き棧敷構や秋晴るゝ
 明日卸す船の祝や秋日和
 五座の峰二座に雲あり秋はれて
 島の神遷宮を秋晴るゝなり

蠅月 ヤヨキ 江村 鬼葉子 此君子 全 水郷 全